

“文革”期の民俗文化現象

周星

本稿は、一九九三年一〇月に北京で開催された中国民俗学会第三次全国代表大会第五次學術討論会での発表に基づいている。冒頭に述べられているように文革研究の主流である政治学あるいは歴史学的視点に対し、民俗文化という切り口で文革を捉えようとするユニークなものである。文中には文革期の特殊な政治状況を背景とした用語が頻出するが、文革を共通体験とする聴衆を前提としているため、格別な説明は施されていない。このため、巻末に訳注と共に解題を付し、本文中に取り上げられている事象を中心に政治的背景も交えて説明を加えた。解題で説明を加えた語については、本文中に※印を付した。なお、「」内は原文。(編集部)

“文革”の十年間は、中国の現代史において非常に重要かつ特殊な時期である。簡単に言えば、“文革”の発生は、それに先立つ数年来の政治及び社会生活中の要因が次第に蓄積した結果であった。同時に、“文革”の遺産は、今なお根深い影響力を持っている。“文革”を研究する意義はここにある。

これまでの“文革”に関する學術研究は、主に歴史学か政治学の観点から行なわれてきた。歴史学は主に当時の歴史的真相を明らかにすることを目的とし、政治学の方は主に権力に注目するのが特徴である。だが、これらとは別の、例えば民俗学や人類学の観点も或いは必要かもしれない。なぜなら、“文革”の

十年間も中国人の民俗生活は完全に中断していたわけではなく、例えば、女性が結婚相手に工場労働者や軍人を理想とするなど、“文革”期には“文革”期の風習が形成されていた。その上、“革命ことわざ”や知識青年歌曲、風刺小話等々、あの時代ならではの文化的創造もあった。十年の間、民俗文化は確かに大きな破壊を被ったが、基層の民俗文化を破壊するのに用いられた道具や武器はやはり民俗レベルの“文化”であった。これは非常に興味深いことである。

“文革”をただ単に国家上層部における権力闘争としてしか捉えない政治学的観点は、往々にして次のような基本的事実を見

逃しがちである。つまり、「文革」は十年に亘って継続し、十億余りの中国人がほとんど例外なくその渦中に巻き込まれた。この運動は、どこから見ても「中国的」であり、「民俗的」でもある。「文革」を民俗学の観点から眺めてみることは、「文革」の土壌を構成した中国の民間社会及び民俗文化に反映されている中国の国民性を理解する上で有効なのではないだろうか。

偶像崇拜

一般に、「文革」は現代中国における「神づくり」運動と理解することができる。「文革」中、人々は文字通り毛沢東を神のように崇めており、およそ毛沢東に関係がある全てのものは、神聖に侵すべからざるものであった。更に、毛沢東への人々の信仰は偶像崇拜及び一神教の性質を帯びていた。

毛沢東の巨大塑像が中国の大、中、小都市の中心広場にあまねく立ち、ほとんど全ての公的機関のホールや会議室には毛沢東の全身或いは半身像が置かれ、慈愛と威厳を湛えて人々のあらゆる政治的社会的活動に共に参加し、様々な儀式において人々の最敬礼を受けた。運動に伴う全社会的な政治動員は各家庭にまで入り込み、各個人にまで及んだ。このため、小型の毛沢東の全身或いは半身像が各家庭に招き入れられ、堂屋（タング）或いは民家の神聖な場所に至上の地位を占めた。その昔、それらの場所には祖先の位牌や様々な神々たちを安置するところであった。通常、塑像は「偉大なる著作四卷」の上に置かれた。

家庭や会議室、ホールでは毛沢東像を中心として、それぞれ儀式の空間が形成され、人々はそこで讚歌や語録歌を歌ったり、語録体操をしたり、「忠の字踊り」を踊ったり、「朝に指示を仰ぎ、夕べに報告する」など各種の礼拝や儀式を行なった。中でも極端であったのは、全ての人が胸に毛沢東のバッジを着けていたことである。様々な材質とデザインのも沢東バッジが、どんなに大のものから豆粒大のものまで、数千種もあったという。毛沢東バッジ製造のためにアルミニウムを使い過ぎ、飛行機製造の原料が足りなくなつたとも聞く。一部には毛沢東バッジを直接自分の肉体に着けた者さえいた。

「忠の字踊り」は当時流行した、集団で毛沢東への忠誠を表現する大衆的舞踊である。人々は毛沢東バッジを胸につけ、手には「毛主席語録」を捧げもつて輪になり、真つ赤な（訳注：革命的な）心を象徴するところの丸い円を描く。そして、歌いながら踊り、歌詞に対応した身振りをする。聞くところでは、当時、瀋陽駅で「忠の字踊り」を踊れない者は汽車に乗せないということがあったという。

毛沢東の肖像画や写真が一日と様々な新聞紙上に登場するようになり、かなり辺鄙な農村や山村でさえ、土地の民家の壁には毛沢東が描かれているようになった。これらは、一面では絶対的な崇拜の対象であり、また一面では絶対的なタブーの対象であった。故意であるか否かにかかわらず、毛沢東の姿を破壊もしくは汚損する行為や事態が起これば、当事者は「反革命現行犯」とみられる恐れがあった。

同時に、毛沢東のかつての住まいや彼が生活したあらゆる場所が「聖地」となり、経歴の全てが「聖跡」となり、著作は「聖書」となり、一言一句が疑いを容れない「聖旨」となった。人々は飽くことなく可能な限りの手段で、毛沢東に「三つの忠実、四つの無限」の決心を表わそうとした。一九六七年から一九六八年にかけて大流行した「最も、最も、最も」を特徴とする「表敬電報」現象の他、最も典型的なのは、「朝に指示を仰ぎ、夕べに報告する」である。「朝に指示を仰ぎ、夕べに報告する」は日々の始業、出勤、就寝、更には食前にも、集団或いは個人で毛沢東の肖像画或いは塑像の前に立ち、その慈愛溢れる面差しを振り仰いで、「赤い聖書」を胸に当て、毛沢東に忠誠心と敬意を表し、毛沢東の「ご長寿の無窮たらんこと」を願った宗教儀式である。人々は「朝に指示を仰ぎ」を終えて初めて、それぞれその日の仕事と生活を始めることができ、「夕べに報告する」で、毛主席に一日の自分の行為を報告してから、やっと安心して眠りに就くことができたのである。

もちろん、これら全ては権力の集中の進行に伴うものである。中国の伝統政治においては、神秘化は必然的に強権化と繋がっている。それだけでなく、信仰対象の高度な集中は、イデオロギーの絶対的な統一を意味している。これは、あらゆる「妖怪変化」の打倒を前提としている。様々な「妖怪変化」への迷信を一掃してこそ、人々の信仰を毛沢東に集中し、統一することが可能となる。ある意味で、これは多神教から一神教への移行でもあった。

赤い中国

中国の民間では、赤色は賑やか、めでたい、暖かい、魔除け、警告などの意味や効能があると考えられている。中国革命の過程においても赤色は象徴として使われた。この二つの一致により、「文革」中には何もかもが真っ赤に塗りつぶされる「赤い海原」現象が形成された。

一九六六年、毛沢東が軍服姿に「紅衛兵」の腕章を着けて、天安门広場で全国各地からやって来た紅衛兵を接見して以来、「赤い司令」と「紅衛兵」「紅小兵」などの組織との間には特殊な関係が生まれた。人々は「赤い心」で「赤い太陽」である毛沢東への忠誠を表し、手に手に「赤い聖書」を持ち、何かという「東方紅」を歌った。毛沢東を「赤い太陽」に喩えれば、都市の居住区には「ひまわり院」が登場した。自分達を太陽の動きを追うひまわりの花に喩えたのである。全国各地の町や村の目抜き通りから路地裏に至るまで、商店の入り口にも民家の壁にも、毛沢東と赤い太陽を組み合わせた絵が描かれ、赤地に黄文字の語録ボードや語録額、更に赤色で書かれた様々な標語やスローガンがあった。大きな集会やデモには、決まって赤旗、赤い花、赤いリボンとそれらで飾り立てられた車が付き物であった。また、革命模範劇の「紅色娘子軍」「红灯記」の結末の大勝利には必ず赤旗が翻る。

一年のうち、一月は「開門紅（幸先がよい）」と呼ばれ、五月

は「五一」「五四」「五七」などの記念日が集中しているため、
「紅五月」（赤い五月）と呼ばれた。

人間関係では、「一人が一人を助ければ、揃って赤くなる」「一帮一、一对紅」が求められ、「真つ赤な一家」「全家紅」に始まり、「全国の山河は赤一色」（台湾を除く）という言い方まであった。

全国各地にあまたの「東方紅広場」が生まれた。一時は地名も人名も「赤色」狂想曲の様相を呈し、地名の重複のために郵便物の郵送に困難を来したり、人名の重複も多くのトラブルを引き起こした。「文革」終焉後は、多くの人が再び改名せざるを得なかった。

「赤」と対になるのは、勿論「黒」である。人々は「赤い五類」と「黒い五類」に分けられ、「赤い」血統を持つ人々は「素性が正しく、生まれつき革命的」（「根正苗紅」）であり、革命的で信頼できるとみなされ、より多くの好条件と機会を与えられた。「文革」中、広く浸透した表現に「親父が英雄なら息子は好漢、親父が反動なら息子はろくでなし」というものがあるが、これなどは有名な諺「龍の子は龍、鳳の子は鳳、鼠の子はやっぱり穴掘りがうまい」を彷彿とさせる。

出身が「赤」くない、或いは半分「赤い」とされた人々が、このような血統論に疑いを表明したこともあったが、遇羅克が「出身論」で冤罪に問われると、ついには血統論を受け入れてしまった。このことは、「一人こければ一族郎党共倒れ。一人当たれば一族郎党羽振りよし」といった観念が中国の庶民の間に深

く根を下ろしているためだとしか説明のしようがない。血統論はかくも根深いものであり、多くの「教育によりよくなる見込みのある子女」は懸命に自らの出身家庭と一線を画せようとした。彼らは「紅衛兵」などの生粋の赤色組織に入ることはできなかったが、「赤」と何らかの繋がりを持つようとして、「赤い外郭団体」を結成した。

血統論は、多数者に安心感を与えただけでなく、出身の良くない「少数者」への迫害に根拠を与えた。こうして、先祖三代を調べる、「犬の子」たちの先祖の墓を暴く、一族郎党巻添えなどの行為が、当たり前に行なわれるようになった。中国の風習では、祖先の墓は子孫をあの家から守ると考えられている。祖先の墓を暴いたり、祖先の汚点を暴露することは、相手を進退窮まる、非常に不利な境地に陥れることになる。

この他、「妖怪変化」に三角帽を被せる、頭を陰陽頭に剃り落とす、罪状札を首に掛けさせる、市街を引き回すなどの行為も、非常に中国的伝統に富んだ、相手の人格を侮辱する方法である。なぜなら、こうして見世物にすることは、相手の「面子」を徹底的に粉砕することを意味するからである。「朝に指示を仰ぎ、夕べに報告する」と違って、「罪」のある者が毛沢東に向って行なう儀式は「懺悔」と呼ばれた。通常、この行為は毛沢東の肖像の前に跪いて行なわなければならないかった。

言語呪術

「文革」期のもう一つの典型的な民俗現象に言語呪術がある。
「文革」期には、毛主席語録、毛沢東詩句、「老三篇」、最高指示、最新指示、「偉大なる著作四卷」などは全て一言が一言にも相当する真理であり、「聖旨」であった。語録ノートが必携品となり、語録ボードや語録塔があらゆる場所とスペースに欠かせない装飾となった。日々の新聞の目立つ場所には、毛主席の語録や最高指示を載せ、どの文章も必ず毛沢東の話を引用しなければならず、威厳を出すために語録部分は特別な書体で印刷された。人々は毛沢東の言葉を用いさえすれば、説得力が生まれ、なおかつ安全だと考えた。「四大武器」における大議論は、実質的には「語録戦争」であって、それぞれ語録中の異なる語句を拠り所にして相手を攻撃し反駁した。毛主席語録を書き写した黒板新聞か壁新聞が必ずあるというのが、「ひまわり院」の外観の特徴であった。

一九六六年から一九六八年まで、全国では、「毛主席語録」が約七億四千余万冊出版された。人々は事あるごとに必ず語録の警句を読み上げて毛沢東思想で武装し、まず偉大なる「精神の糧」と「精神の武器」を得るのであった。大衆大会となれば、必ずや全員で「語録」を打ち振ってスローガンを叫ぶか、「語録」を開いて、集団でその中の一節を朗読した。

毛沢東の最高指示や最新指示が発表されるたびに、国を挙げ

ての大騒ぎとなった。人々は銅鑼や太鼓を打ち鳴らし、歌い踊って、夜通し喜びに沸いた。通常、最高指示の伝達は翌日に持ち越してはならなかった。

新聞にこのような事例が報道されたことがある。ある人民公社員の農民の家から出火したが、この農民は家屋や屋内の家財は後回しで、まず「赤い聖書」を持って外へ飛び出した。記事は貧農下層中農は政治的自覚が高い、「毛主席語録」は彼らの命の綱なのだと言評した。この話は我々に「文字を書いた紙を敬い大切にする」〔敬惜字紙〕などの庶民の善良な風習を思い出させる。

あらゆる儀式、様々な場面で、使用頻度が最も高かった言葉は、「万歳」「万々歳」「長寿の無窮たらんことを」であった。問題は、これらの語が意味するところを人々が本気で信じていた点にある。「朝に指示を仰ぎ、夕べに報告する」を始め、「雷に打たれようと動じない」「日々に読む」(毎日の始業前に必ず毛主席の著作を学習する)、語録カードや、ピラ、学習班、学習経験報告会、経験交流会、毛沢東思想宣傳隊、及び「臨機応変に学び、臨機応変に運用する」等々、言語呪術は儀式化と形式化の過程で最高潮に達した。「口先」と「筆先」がますます重視されるようになり、「実践」が疎かになっていった。言語呪術はますます人々が理性的に思考し行動する能力に影響を及ぼすようになり、ついにはすっかりコントロールするまでになっていった。標語やスローガンの洪水があちこちで被害をもたらした。地名や人名に溢れた「衛東路」「向陽大院」「紅衛巷」「朝陽

大街」「東方紅広場」「忠廷兵」「左紅兵」「李反修」「趙文革」等も言語呪術の一形態である。

言語呪術と関連するものに、言語上のタブーがある。文字獄、諱、それに数え切れない程の「反動標語」事件が起こった。「敵」の名前に赤色で×を打ったり、彼らの名前を逆さにしたり、「砲撃せよ」「炮打」*、「油釜にぶち込め」「油炸」*、「焼き殺せ」「火烧」*などの呪いの語を加える、音をもじって罵る等々、どれもが言語黒魔術の表われである。

「西紅柿」(トマト)は、タブーに触れるということで、一時は「東紅柿」に改名された。このような例は枚挙に暇が無い。南京鉄道建築班の肖という労働者は、土窯の西側で仕事をしていて、東風に運ばれてくる土窯の煙に悩まされていた。そこで、ふと「西風が吹けばいいのに」と口にした。なんと、これが毛沢東の名言「東風が西風を圧倒する」に反対するものだという指弾を受け、三年の監視処分を受けた。

もちろん、「文革」期の呪術行為は言語面に留まるものでは決してない。毛沢東の接見を受けて握手をした人物は、感激して長い間手を洗わないものだった。これは明らかに感染呪術に基づくものだ。紅衛兵の経験交流も、実は紅軍二万五千里の長征の模倣である。これも呪術の一種ではなからうか？ 興味深いことに、長征を真似る行為は、「文革」終息後も依然として時折り耳にする。

「中華」思想

「文革」期には、「世界革命の中心」に関して次のような主張がされたものだった。プロレタリア階級の世界革命は、革命の中心がドイツ(マルクス、エンゲルスの時代)からロシア(レーニン、スターリンの時代)へ、そして中国(毛沢東の時代)へと移行するという経緯を辿っている。だから、中国革命は世界革命の中で特別な重要性を持つ、というものだ。

当時、人々は中国が世界革命の根拠地であると信じ、帝国主義、修正主義、反動派の包囲の中にあっても、ひとり中国さえ持ちこたえれば、中国さえ原則を堅持すれば、世界には希望があると考えていた。それどころか、林彪は「人民戦争勝利万歳」と題した文章で、第三世界を「世界の農村」に喩え、北米や欧州の「世界の都市」はこれら農村に包囲されており、農村が都市を包囲する中国革命を模範とする「地球規模の人民戦争」が正しいのは帝国主義を葬り去ることができるかと主張した。

実は、このような主張の思想的基盤としてあるのが、他でもない中国人の宇宙観、「中華」思想なのである。非常に象徴的な写真がある。天安門を背景に多くの外国人が毛沢東を囲んでいる。テーマは「世界の人民は毛主席を熱愛する」である。このような理論においては、世界の人民は塗炭の苦しみの中にあり、解放された中国人民が救いの手を差し伸べるのを待ち望んでいるのである。だから、中国人は全力を振り絞って、たとえ自分

の食い扶持を削つてでも、他国の革命や国家建設を支援しなければならぬ。「文革」中、人々はこのような神話を信じ、世界における中国の現実の位置をすっかり忘れていた。

「中華」思想と関連するものに、「文革」期のあらゆる外来文化の拒絶がある。一九世紀後半以来、中国が西洋或いは国外のあらゆる文化をそっくり妖術邪説としたことは、義和團運動など「土着」傾向のある社会運動にしばしば見られる現象である。これは実のところ、中国の伝統に深く根差したものであり、「山海経」の異民族観にすでに明らかな形で現れている。ただ「文革」期に再び溢れ出し、典型的な形で現れたに過ぎない。

「中華」思想の影響のため、中国人は往々にして自己と世界との関係を正確に処理することができない。身の程知らずに世界の動きを「指導」しようとし、中国は世界の中心だと信じきっているか、世界の動きとは距離を置いて、「栄えある孤立」でもって世界と対立するか、どちらかなのである。注目すべきは、「文革」期には、この二つの傾向がなんと互いに一体となって現われている点である。世界革命の根拠地を自任し、世界革命の成否は中国に係っていると主張する一方で、国門を閉ざして耳目を塞ぎ、世界の発展の大勢とは自ら繋がりを断つた。一九七四年の「蝸牛事件」では、アメリカ企業が中国に贈った蝸牛を象つたガラス細工を、相手方が自分達のことを「這って歩く」と侮辱したものだと考えて大袈裟に書き立てたが、実際には蝸牛はアメリカでは幸運と幸福の象徴なのである。

「中華」思想の重要な内容の一つに、大一統の「天下観」があ

るが、これも「文革」期には非常に典型的な形で現れた。例えば、少数民族からの讃歌が大いに行なわれたこと、権力再編後の造反派の大連合を「大いに乱れて大いに治まる」と呼んだこと、全国の「赤一色」の達成は、世界革命の最終的勝利への第一歩に過ぎないとしたこと、全国を「毛沢東思想大学校」に改造することで、イデオロギーの絶対的統一を目指したこと、等々である。

二項対立の論理

「文革」はいわゆる「二元論」を批判したが、それは政治と実務との関係について言ったものであった。だが、政治と実務という二分法そのものが、中国の民間文化中の二元論理に基づくものなのである。同じような二元的分類及びそれらの対立闘争の観念は、「文革」期、次のような多くの方面に現れた。

「一つが二つに分裂する」と「二つが一つに融合する」、プロレタリア階級とブルジョア階級、社会主義路線と資本主義路線、マルクス主義と修正主義、毛主席の革命路線と劉鄩反革命路線、香しい花と毒草、赤と黒或いは赤と「専」、善人と悪人、造反派と保皇派、左と右、革命と反革命、公と私、集団主義と個人主義、大衆（アマ）と専門家（プロ）、貧農下層中農と地主富農多数と少数、精神と物質、人と物（天、自然、武器）、内と外、等々。こうした二分法の論理は中国の民俗文化に深く根差した思维様式であるが、「文革」期にはひときわ突出した形で現れた。

我々は中国の民俗文化あるいは郷土文化の内に、陰と陽、天と地、善と悪など、二項対立を基本特徴とするカテゴリーを容易に見つけることができる。言うまでもなく、これらと上述の「文革」期のカテゴリーとは明らかに構造を同じくするものである。

しかし、二項対立は価値の偏重が無いことを意味するのではなく、反対に価値の偏重を前提としている。例えば、「一つが二つに分裂する」と「二つが一つに融合する」とでは、「一つが二つに分裂する」が優り、プロレタリア階級とブルジョア階級との対立においては、「プロレタリア階級を興し、ブルジョア階級を殲滅する」(「興无天資」、左と右との衝突においては、「左に寄り過ぎようと、右には傾くな」(「宁左勿右」、公と私との間では「大公無私」「滅私奉公」「克己奉公」「私心と闘い、修正主義を批判する」(「斗私批修」)であり、一般大衆とその道のプロとの関係では、大衆が真の英雄であり、人と物との矛盾においては「人間が必ず天に勝つ」(「人定胜天」、多数と少数との関係においては、多数(大衆)による独裁であり、赤(革命的)と「専」(専門的)との関係においては、「赤と専を兼ね備える」(革命的であると同時に専門的知識を持つ)などと言うものの、実際には政治主導であり、集団主義と個人主義との関係においては、集団主義が優先であり、個人主義は個人享楽主義が否定され、個人英雄主義であるべきとされた。個人主義は常に封建主義や資本主義、修正主義と結びつけられた。内と外の関係では、内が優先であり、内外の区別を強化するだけでなく、何かと言え

ば国内の問題や困難の原因を外部の敵による破壊活動に帰すのが常であった。

“大同”と“千年王国”

“文革”は、毛沢東が自ら発動した毛自身の理想を実現せんとする運動である。毛沢東は偉大な理想主義者であり、毛の思想には中国古代の“大同”の夢の影や、中国の農村社会において小規模生産を背景に生まれた“ユートピア”的幻想の要素が見受けられる。

毛沢東は低賃金高就労の方法で、一時期、初歩的に都市における富の均等配分の問題を解決したが、“一に大きく、二に共産的”な人民公社の平均主義のやり方で建国後の農民問題を解決し、社会の公平と“大同”を実現しようとした試みは基本的に失敗に終わった。全国七万余ヶ所の人民公社が数十年の運営の結果もたらしたものは、発展ではなく、立ち遅れと貧困であった。“共産化の嵐”を特徴とする人民公社食堂の共同炊事の破綻も毛の目を完全に覚まさせることはできず、毛は人民公社の実験にあくまで拘ったばかりか、更に一歩進んで継続革命の目標を定めた。

中国の庶民生活には、実に様々な“共食”或いは“共同炊事”の慣習や伝統がある。人民公社の“食堂”は、実のところ、これらの慣習や伝統に手を加えて拡大したに過ぎない。ただ違っていたのは、慣習における“共食”は、通常、象徴的なもので、

家庭生活の基本単位を破壊することはない。「食堂」の失敗の原因は、或いは「共食」自体にあったのではなく、それが農民の家庭を犠牲にするものであったことにあるのかもしれない。

「文革」は確かに文化に対する革命から始まった。一九六六年八月公布された「十六条」は擄取階級の「旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣」、つまり「四旧」を革命対象とした。毛沢東は人々の考えや道徳、慣習、思想を徹底的に変革しようとした。しかし、毛は既存世界のあらゆる秩序をぶち壊すことには長けていたが、自分の頭の中にあるその新世界を打ち建てることは不得手であった。

毛沢東が構想した新世界は、基本的には毛が一九六八年五月七日に発表した「五・七指示」[※]によって説明できる。毛は農村の人民公社エリートピア構想を一步進めて新たな内容を付け加えた。軍事的エリートピアである。では、それは一体どのような新世界なのだろうか？

まず第一に、それは社会分業のない、分業に反対する世界である。この社会では、軍人は軍事を学ぶだけでなく、政治や文化についても学ぶ。農業の副業生産に携わるだけでなく、工場も動かし、同時に地域の大家工作を行ない、ブルジョワ階級の批判も行う。労働者は当然労働が主となるわけだが、政治や軍事、文化の学習にも参加し、ブルジョワ階級の批判も行う。農民は農作業が主であるが、軍事、政治、文化の学習にも参加し、ブルジョワ階級の批判も行う。学生は学業を主とするが、文を学ぶだけでなく、工業、農業、軍事を学び、ブルジョワ階級の

批判も行う。毛沢東は社会の分業を認めず、分業が進歩を意味することも認めなかった。

次に、それは学校化した社会である。学校化した社会はより活力があると毛は考えていたのかもしれない。毛から見れば、全国は一つの大きな学校となるべきであり、この巨大な学校の中で、工業は大慶に学び、農業は大寨に学び、全国人民は解放軍に学ぶべきなのであった。毛沢東は解放軍の一つの巨大な学校に作り上げ、そうして全国をその解放軍のようにしようと考えた。この巨大な学校の中で人々は互いに学ぶ。みなが共に解放軍に学び、共に毛沢東思想を学ぶ。この巨大な学校の中では、知識分子はどれほどの地位も使い道もない。なぜなら、知識分子が持っているところの「知識」は、そこでは大して役に立たないからである。言うまでもなく、それは制服から髪型まで、あらゆる物が画一化された社会である。

第三に、それは人間の「道徳性」だけを認め、「生物性」を認めない社会である。雷鋒、王傑、愚公、張思德、ベチューン、歐陽海、劉英俊……英雄的人物が次から次へと現れ、どんな人間離れしていった。英雄たちの多くは、死を前にして「毛主席万岁！」と叫んだり、毛沢東語録を手に硬く握り締めているのだった。次から次へと輝かしく偉大な模範像を示し、人々に絶えず学ぶことを求める一方で、「私心と闘い、修正主義を批判する」や「私」の念がちらつと過ぎるのを暴き出す[※]、更には大衆運動など「魂に触れる」やり方で、思想革命を行った。

毛沢東の理想は、誰もが「些かも己を利さず、専ら他人を利

する。道徳的社會を造り上げることであった。毛は知識分子の知識をさえ、「私有財産」とみなし、知識分子をブルジョア階級に分類した。毛は、「ブルジョワ階級の特権」を生み出す恐れのあるあらゆる要因を排除することを求め、人々の物質的欲求は全く考慮しなかつた。

第四に、それは言うまでもなく、貧富の差がなく、自力更生と、足るを知らば常に樂しを旨とする社會である。毛沢東は、土地の國有と集團所有、及び非常に限られた「均田制」（自留地）でいつて、小農及び生じる恐れのある「ブルジョワ階級の特権」を抑制しようとした。明らかに、平均主義は中國社會に伝統的に深く根ざしたものである。毛沢東は人々のこの願いを叶えただけでなく、これを有効な資源として十分に活用した。当時、「延安精神」への回帰はほとんど絶対的価値を与えられていた。不幸なことに、もともと非常に貴重なものであつた自力更生の精神は、閉鎖主義と結びつき、ほとんど意固地な排外と自閉の類義語に墮してしまつた。

この他、「昔の苦しみを想い、今の幸せを知る」^{*}は、人々が恩に感謝し、徳を称える表現形式となつただけでなく、現状に満足し、欲望を克服するよう人々を戒めるのに最も有効な基本手段となつた。このような社會においては、欲望が抑制されるだけでなく、愛情は不必要なものとされた。愛情は「ブチブルの情緒」だからである。この点は、若干プラトンの「國家」が想定した理想國家に似ている。

このような理想的な「大同」社會を打ち建てるために、毛沢

東は次のような異常かつ過激なプロセスと方法を用いた。

- (1) 青春期の最中にある青少年たちに、青年期の毛を真似て、大いに革命をやり、毛以外のあらゆる權威に挑戦し、既存の社會秩序の全てを粉砕させ、「旧世界を破壊させた」。
- (2) 知識分子は「牛小屋」に、知識青年は「農村定住」に行かせ、労働者や農民、兵士による改造と「再教育」を受けさせた。
- (3) 労働者、農民、兵士たちを直接大學へ進学させ、更には彼らに大學を管理、改造させた。その上、これら全ては試験などの手続きを一切経ないで行なわれた。
- (4) 大學、中學、小學校、及びあらゆる教育機關で一律に「社會に学ぶ」を実施し、社會を教室としたり、逆に工場内に「七二一」「大學を開いたりした」。
- (5) 行政機關の幹部職員を「五七」幹部學校へ行かせ、労働による訓練を施した。
- (6) 都市の医療關係者を農村へ行かせて農民に奉仕させ、次いで農村に農民自身の医療人材、即ち「裸足の医者」を養成した。
- (7) 軍では階級制を廢止し、軍隊を「大學校」に編成した。更に、全國を軍營と化して國民皆兵とし、工場、農村、學校、政府機關、商店、どこにおいても一律に「團、營、連、排、班」制を敷いた。
- (8) 軍隊に「三つの支持、二つの軍事」を命じ、全社會を統制し、教育し、訓練する任務を与えた。
- (9) 先祖伝来の（春節など）、及び西洋の「四旧」（封建主義、資

本主義、修正主義)を根こそぎ葬り去り、毛沢東思想に取って代わらせた。

このため、通常の常識では理解できない奇怪な出来事がたくさん起こった。例えば、小靳莊のように、農民が芝居を演じ、ひとに野良仕事を頼むとか、入試で白紙答案を提出したのに大学に合格する等々である。

事実在即して見れば、毛沢東は確かに自分が好ましく思わない世界を破壊したが、憧れていたところの“新”世界を打ち建てることはできなかった。それは、毛の理想がユーロピア的な幻想に過ぎなかったからである。実際、毛沢東は“四旧”の破壊の後、何が“四新”であるのかを具体的に示すことができなかった。その上、毛が“四旧”破壊に用いた手段や武器自体が旧来のものであったとさえ言えるのである。

文化人類学における“土着主義運動”(千年王国運動)の分析の観点から見ると、“文革”はかなりの程度、“土着主義運動”の明らかな特徴を示している。例えば、毛沢東自身が自覚的であったか望んでいたかにかかわらず、毛は常に“先覚者”“指導者”“預言者”“救世主”として姿を現し、毛の側近や信任を得た人物は、実質的にはシャーマンや牧師のような役割を演じていた。運動は宗教的熱狂の形で展開し、伝統との決裂を目標に掲げてはいたが、実際には“伝統”への回帰が運動の特徴的現象であり、運動が回帰したところの“伝統”には、“革命”の伝統(長征や造反など)だけでなく、歴史上民俗上のもの(“大同”や平均主義など)があった。運動の目標は、とこしえ

に続く理想的な新世界を打ち建てることであり、この新世界は人類史上に普遍的かつ究極的な意義(中国の農村社会によって改造された“共產主義”)を持つものだと人々は信じていた。絶対的排外と外部世界との断絶及び対立(反帝国主義、反修正主義、各国の反動派の打倒)等々である。“文革”はまぎれもなく極端に排外的な性格を有していた。“外国かぶれ”“売国奴”“外国との内通”などの罪名はいつでも成立し得るもので、国外とのいかなる繋がりも危険であった。外部世界との対抗の中にあつて、人々にはつきりとした危機感を抱いていて、「戦争準備」「飢饉準備」などはみな危険に対処しようとするものであつた。

“土着主義運動”に関する理論によると、伝統社会の崩壊や固有文化への外来文化の刺激及びそれにより引き起こされる危機的状况、外部世界の圧力などが通常“土着主義運動”の勃発を引き起こす基本的背景である。今世紀六〇年代から七〇年代を振り返ってみると、数千年来の社会の伝統が困難な転換に直面しており、マルクス・レーニン主義(これも外来文化)も更なる“中国化”の課題に直面していた。西側各国の新中国に対する封鎖とソ連との反目によって、中国は初め本意に孤立させられ、その後自ら“光榮なる”孤立の道を選択することを余儀なくされていった。これら諸々の状況は、“文革”の発生とその行方に決定的影響を与えた。

毛沢東「ブーム」

一九九〇年代初頭以来数年間、中国大陸では毛沢東「ブーム」が巻き起こり、人々の注目を集めた。そこで、「中国人は再び毛沢東を発見した」などと言う人もあるが、実際は毛沢東が中国人に忘れられたことなど、ついぞなかったのである。

例えば、雲南の某地に「亡霊首脳部」が出現したことがある。地元の人々は、毛沢東や朱徳、劉少奇、周恩來などが死後に当地の村の傍にやって来ていて、死後も始終会議を開いては地元の人々のために問題を解決してくれるという。その上、なかなか霊験あらたかだそう。また、チベットの牧場では、多くの牧民たちのテントに昔から毛沢東の肖像画とグライ・ラマ像が並べられている。陝西省南部の山区では、葬儀の際には「葬礼行進曲」を流す。この官製の楽曲は、一九七六年に毛沢東の国葬が執り行なわれた際に一般庶民に知られるようになり、その後広く民間に浸透して、礼楽が民間の儀礼慣習となった典型例となった。北京の毛主席記念堂では、遺容拝謁に訪れる人の列が途切れたことはない。民間の噂話の中には、毛沢東に関するミステリアスな伝説が多くある。例えば、毛沢東警護隊の番号八三四一は、毛沢東が八三歳まで生き、四一年間政権を掌握することを暗示したものだ等等である。筆者の友人の一人は「毛主席がおらが村にやって来た」という小説で、ある雑誌の全図賞を受賞した。言うまでもなく、毎年の毛沢東生誕記念日と

逝去記念日には、決まって何らかの官製の記念活動がある。

毛沢東の死は、一時的に中国に権力と信仰の真空状態をもたらした。「文革」の過ちを反省せねばならなくなった時、人々は騒ぎを大きくした側近たちから毛沢東を切り離して考えようとしたものだ。一時期、周恩來が人々の信仰の埋め合わせの対象となった。

毛沢東の生前における「神づくり」運動は終わったが、その死後、民間で新たな「神づくり」が始まった。むしろ、毛沢東は死後の「神づくり」に責任を負う必要はない。中国の民間信仰の特徴に鑑みれば、毛沢東は将来必ずや農村社会で信仰される諸々の神々たちの新たな一員となっているに違いない。

都市では、運転手が毛沢東の肖像画を車の運転席にぶら下げている。これは一種のファッションであるだけでなく、お守りの意味を持つている。「赤い太陽」のリバイバルは、「文革」世代に懐旧の情を引き起こした。(彼らにしてみれば)「文革」が否定されるのは構わないが、それは彼らの時代そのものであり、彼らの青春や情熱や夢はあの時代と密接に結びついているのだ。しかし、現代の音響技術とテイストと意味合いでお色直しを施された「赤い太陽」は、もはや儀式に使われる讃歌ではなく、流行音楽の一つである。このことは、目下の毛沢東「ブーム」が単に新しい流行現象に過ぎないことを最もよく表わしているかもしれない。それは、都市においては、市民社会におけるポップ・カルチャーの一部であり、農村においては、民俗文化と郷土文化の新しい要素なのである。

報道、出版、映像などのマスメディアは、意識的或いは無意識に毛沢東「ブーム」を煽ったが、毛沢東像からは「マルクス主義」の色合いが次第に薄れ、「民族主義」の色合いが次第に濃くなってきている。毛沢東「ブーム」には、依然としてイデオロギーの動向がある程度伺われるというものの、主流は市場経済を前にした大衆の不安、及び毛沢東に代表される平均主義の社会と時代への未練と懐かしさである。

参考文献

金春明等『「文革」時期怪事怪語』求实出版社、一九八九年

王毅『文化大革命「與巫術文化」』「社会学研究」一九九三年第三期

訳注

〔1〕原文〔堂屋〕。伝統的家居において、中庭を挟んで入口の正面にある母屋の中央の部屋。祖先祭祀や来客の接待に用いる重要な部屋。

〔2〕嚴家其・高舉『文化大革命』十年史』上册、(潮流出版社、三八六頁)に湖南省での事例が紹介されている。また、鄭義『歴史的一部分』(万象圖書、一九九三年)、張承志『紅衛兵の時代』(岩波新書、一九九二年)に、作家鄭義が中学時代に〔黒五类〕として毛パツジの着用を許されず、着衣で隠して胸に直接パツジを着けたことが書かれている。

〔3〕〔五一〕はメーデー。〔五四〕は一九一九年五月四日に始まる五四運動の、「五七」は一九六六年五月七日に書かれた五・七指示の記念日。

〔4〕嚴家其・高舉、前掲書(上册)、四五〇頁によると、一九六八年一月二二日『光明日報』の記事を指す。

〔5〕これらの地名・人名は、「衛東」(毛沢東防衛)「紅衛」(赤い衛兵)「朝陽」(太陽を仰ぐ)「東方紅」(東方に陽が昇る)「左紅」(革命的左派)などの文革期特有の政治的価値を持った語彙を含んでいる。

〔6〕本来「西から来た赤い柿」の意であるが、西方が赤い、革命的の意味にこじつけた。

〔7〕原文は「一分爲二」「合二而一」。中国哲学史上の重要命題の一つ。この二つは必ずしも対立するものではないが、一九六四年に始まった学術論争は、「合二而一」を階級闘争を否定する矛盾調和論として批判する政治批判に発展し、「合二而一」論者は文革期には厳しい迫害を受けた。

〔8〕張鉄生のことを指すと思われる。張は一九七三年の大学入試に際し、ほとんど白紙状態の答案を提出したが、裏面に指導者に当てて、日頃の勤勉さを訴え、配慮を願う手紙をしたためた。これが四人組の目にとまり、一躍「反潮流英雄」として宣伝された。

(邦訳 田宮 昌子)